

先輩看護学生による後輩看護学生への演習指導ボランティア参加動機について — 2 年次に演習指導を受けた看護学生が指導をするにあたって —

高野 真由美¹⁾ 松本 佳子¹⁾ 紫藤 恵¹⁾

要 旨

本研究の目的は、老年看護方法Ⅱ 看護過程演習のロールプレイにおいて、先輩看護学生が演習指導ボランティアに参加する動機を明らかにすることである。演習終了後、演習指導ボランティアの参加動機について無記名で自由記載をしてもらった。結果、他者のための〔他者志向的動機〕と、自分の学びのための〔自己志向的動機〕であった。その他に〔個人的興味〕〔報酬〕〔友人同調〕が動機にあった。今回、明らかになった他者志向的動機は、2 年次に指導を受けた経験や周囲への「恩返し」であり、互恵性に基づいた動機と考えられる。一方、後輩への指導を通して学びたいという自己志向的動機は、自ら主体的に学ぼうとする動機である。これは、将来看護専門職として学び続けていくうえで重要な姿勢と考えられた。

キーワード：看護学生、先輩、後輩、動機、演習

I はじめに

A 看護短期大学老年看護学では、講義を主体とした教員主導型の授業のみでなく、学生が主体的に学ぶことができる学生参加型の小人数でのグループワークや体験を取り入れた演習など様々な授業の工夫をしている。2 年次後期に開講される老年看護方法Ⅱの看護過程演習では、グループメンバーが共に力を合わせて学び合い、経験を共有する協同の精神に基づく学習を目標とし授業を展開している。具体的には、課題となる事例を提示後、個人学習したものを小人数のグループで意見交換しながら事例に対する学びや認識を深め、さらにクラス全体で共有し、その後に自己の振り返りを学びとする方法をとっている。また、この演習ではグループで立案した介入計画にそってロールプレイを実施し、看護師役、患者役の体験から学びを共有する方法をとっている。しかし、そのロールプレイにおいて、まだ実習経験の少ない2 年生は、事例の患者のイメージが付きにくい、患者役になりきれず、看護師役が援助しやすいように動くなど、臨場感に欠ける場面が見受けられていた。そのため、実践した援助に対する患

者役の反応から評価し修正をしていくプロセスに課題があった。そこで、平成 20 年度より、実習科目の履修が全て終了した3 年生が演習指導ボランティアとしてロールプレイに参加し、2 年生へ援助方法の助言をする演習を試みてきた。その結果、2 年生は3 年生から臨地実習での経験を踏まえた患者の状態の捉え方の指導を受け、援助方法を学ぶことが出来た。また3 年生は、2 年生の指導を通し自己の成長を認識するなど学年間で共に学び合う学習効果が確認できた¹⁾。

先行研究において、先輩看護学生が後輩看護学生の技術演習へ参加し指導することに関する報告は、上田²⁾の屋根瓦式教育の効果や、川村³⁾の縦割りグループ活動、米田⁴⁾の先輩看護学生参加型の協同学習に関する効果など数件見受けられる程度である。それらの報告では共通した効果として、先輩看護学生の指導を受けることで、看護技術への学習の動機づけと意欲向上があげられていた。また、指導をした先輩看護学生自身にも学習意欲の高まりや達成感がみられ、高野の調査⁵⁾とほぼ同様の結果であった。しかし、先輩看護学生から教えられた経験を持つ学生、すなわち2 年次に3 年生から指導を受けた学生が教える側として技術演習へ参加すると

1) 川崎市立看護短期大学

いったことに関する調査報告は見受けられない。

単科の3年課程であるA看護短期大学は、講義や実習などタイトなカリキュラムであり、一部の課外活動や大学祭の行事以外は、先輩と後輩が交流する機会が非常に少ない。そのような状況の中、毎年複数の3年生が演習指導のボランティアを希望してくれることについて、2年次に3年生から教えられた経験が影響しているのではないかと考えた。そのため、今回演習指導ボランティアの参加にいたった動機を明らかにする必要性があると考えた。本研究では、先輩看護学生が演習指導ボランティアに参加する動機を明らかにし、老年看護方法Ⅱの教育方法を検討する上での資料にしたいと考える。

Ⅱ 研究目的

老年看護方法Ⅱの看護過程演習におけるロールプレイへ先輩看護学生が後輩看護学生への演習指導ボランティアとして参加する動機を明らかにする。

Ⅲ 研究方法

1 研究デザイン

質的研究

2 データ収集期間

平成24年12月3月～12月21日

3 対象者：

A看護短期大学における老年看護方法Ⅱの看護過程演習で脳梗塞事例を用いた清潔援助と排泄援助のロールプレイに、2年次に3年生から指導を受けた経験があり、今回ボランティアで参加した3年生16名。

4 調査内容と方法：

調査内容は、「演習指導ボランティアに何故参加しようと思ったか」について無記名で自由記載をもらった。

演習指導ボランティアに参加後、説明書とアンケート（同意書付）を配布し、共同研究者から説明書を用いて研究に関する説明をした。アンケートの回収は学内に設置したボックスにて回収をし、回答者が特定されないように配慮した。

5 演習の概要と演習指導ボランティア募集について

1) 演習の概要

2年次後期の老年看護方法Ⅱ（30時間、15コマ）において、高齢者の健康障害（症状、治療、処置を含む）に関する講義（12時間6コマ）を実施。その後、看護過程演習（16時間8コマ）を実施している。看護過程演習の概要と進め方は以下の表1と図1の通りである。

表1 平成24年度老年看護過程の概要

老化を基盤とした健康問題が及ぼす生理的機能、自己概念、役割機能、相互依存の変化により生活機能に支障をきたしている高齢者への看護過程の展開がわかる。

- 1 疾患や障害が高齢者の生活機能にどのように影響を及ぼしているのかアセスメントできる。
- 2 アセスメントから高齢者の持てる力に働きかけられる援助計画を立案できる。
- 3 高齢者が望む生活機能は何かということに着目できる
- 4 実施した結果を高齢者の反応に基づき評価修正し実施していく必要性がわかる。

8コマ16時間

回	内容	備考
1	老年期にある人の看護過程 事例提示	個人ワーク
2	・各自、個人ワークで書いた情報関連図と看護上の問題を提示し、グループ内で発表し合いディスカッションをする（アセスメントも各自持参）	グループワーク
3	・クラス全体で各グループワークでの学びを発表し、学びを深める	全体ワーク
4	・各自、個人ワークで書いた看護計画（介入計画）についてグループ内で発表しディスカッションをする	グループワーク
5	・看護過程演習の実施計画をグループで立案する。	グループワーク
6	清潔について立案したグループの計画に沿って実施、評価（ロールプレイ）	グループワーク 先輩指導
7	・排泄について立案したグループの計画に沿って実施、評価（ロールプレイ）	グループワーク 先輩指導
8	援助の実践から、看護過程を振り返る（自分の看護過程一式持参する）	グループワーク 個人ワーク

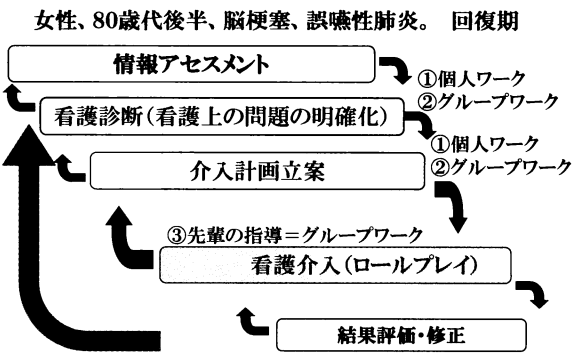


図1 看護過程演習の進め方

2) 演習指導ボランティア募集について

看護過程演習6回目のロールプレイの前に、学内掲示板に演習指導ボランティア募集の案内を掲示し、同場所に参加申込書を設置した。参加募集内容は、演習指導日時と打ち合わせ日程、演習内容、謝礼について明示した。参加希望者は、参加申込書を研究者の研究室前のボックスへ投函するか、研究者宛てのメールでの申込にて募った。

6 分析方法：

全記述内容をデータとして繰り返し読み、参加動機に関連する記述部分を抽出した。その抽出した記述の意味内容を損なわず、なおかつ隠された主語や目的語などを補いながら内容が明瞭になるよう書き表しコード化した。コードの中で意味内容が類似したものを集め、その共通する意味を表すようサブカテゴリー名を表現した。さらにサブカテゴリーの中で意味内容が類似したものを集め、その共通する意味を表すようにカテゴリー名を表現した。

なお、分析にあたってはカテゴリーの信頼性、妥当性を確保するために研究者間で繰り返し検討をした。

7 倫理的配慮：

研究目的と意義、個人情報保護、研究参加へは自由意志であること、途中で中止したい場合は、それに伴うデータは取り扱わないこと、得られたデータは、学会発表、研究論文以外では使用せず、終了後は破棄することを

口頭及び文章で説明し、同意書にて研究協力への同意を得た。

なお、本研究は川崎市立看護短期大学研究倫理審査委員会の承認を受け実施した。

IV 結果

演習指導ボランティアに参加した3年生12名(回収率75%)の回答を得た。

演習指導ボランティアの参加動機については、[他者志向的動機]、[自己志向的動機]、[個人的興味]、[報酬]、[友人同調]の5つのカテゴリーが抽出された。(以下、カテゴリー[], サブカテゴリー<>、データは「 」で示す。(表2参照)

[他者志向的動機]では、「昨年先輩にアドバイスいただいたことがとても役にたったので、同じように少しでも2年生の役にたてばと思った」や、「昨年先輩が様々なアドバイスをくれたように、自分も2年生に何か貢献できればと思ったから」、「自分が2年生の時に先輩がきてくれ、アドバイスをしてくれたことが嬉しかった思いを返したい」など、昨年先輩に教えられたことによる経験から役にたたい、貢献をしたい思い>であった。また、「お世話

表2 演習指導ボランティア参加の動機

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
他者志向的動機	役立ちたい、貢献をしたい思い	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年先輩が様々なアドバイスをくれたように、自分も2年生に何か貢献できればと思ったから ・昨年、先輩方が教えてくれたのがとてもよかったから、自分も役に立ちたいと思った ・昨年先輩にアドバイスしていただいたことがとても役にたったので、同じように少しでも2年生の役にたてばと思った ・先輩としてできることを教えてあげたかった ・2年生に知っている子もいるから役立ちたかった ・自分が2年生の時に先輩がきてくれ、アドバイスをしてくれたことが嬉しかった思いを返したい ・参加希望者が定数に達していなかったため自分でよければ助けたい
	協力とお礼の気持ち	<ul style="list-style-type: none"> ・お世話になっている方々に少しでも協力できたらいいかなと思った ・学校や先生方にお礼の気持ちとしてやりたいと思った ・先生に声をかけて頂き、協力したいと思った
自己志向的動機	学習への期待	<ul style="list-style-type: none"> ・後輩を指導することで自分も学ぶことができると思ったから ・自分の理解を深めたかった ・卒業後に使える知識を吸収したかった ・人見知りで会話が苦手だったので経験になると思った ・(いつか後輩をみる立場となるので)教える難しさを知りたい
	自己成長の確認	<ul style="list-style-type: none"> ・自分がどれだけ成長したかを知りたいと思った ・アドバイスをする側として参加することで自分がどのくらい成長できたのか知れたらいいなと思ったから
個人的興味		<ul style="list-style-type: none"> ・教えるのが楽しそう ・指導がおもしろそうだから ・2年生との交流がなかったため、交流をもちたかった
報酬		記念品がほしかった(3件)
友人同調		<ul style="list-style-type: none"> ・友達と一緒にだったから ・友達もやるから

になっている方々に少しでも協力できたらいいかなと思った」や、「学校や先生方にお礼の気持ちとしてやりたいと思った」という＜協力とお礼の気持ち＞であった。

次の〔自己志向的動機〕では、「後輩を指導することで自分も学ぶことができると思ったから」や、「自分の理解を深めたかった」や、「いつか後輩をみる立場となるので教える難しさを知りたい」など＜経験による学習効果の期待＞であった。また、「自分がどれだけ成長したかを知りたいと思った」や、「アドバイスをする側から自分の成長を知れたらいいと思った」という＜自己成長の確認＞であった。

〔個人的興味〕では「教えるのが楽しそう」や、「指導がおもしろそうだから」、「2年生との交流がなかったため、交流をもちたかった」であった。

〔報酬〕では、「記念品がほしかった（3件）」であった。

〔友人同調〕では、「友達と一緒にだったから」、「友達もやるから」であった。

V 考察

1. 他者志向的動機について

今回、明らかになった参加動機の一つである他者志向的動機の「自分が2年生の時に先輩がきてくれ、アドバイスをしてくれたことが嬉しかった思いを返したい」は、お礼の気持ちである。また、「昨年、先輩方が教えてくれたのがとても良かったから自分も役に立ちたい」、「昨年先輩が様々なアドバイスをくれたように、自分も何か貢献できればと思ったから」は、自分が他者から支援を受けたことに対し、次は自分がその期待に応えようとすることも含まれていると思われる。これらは、2年次に先輩看護学生からボランティアで指導を受けた経験が影響しているのではないかと考える。さらに、「学校や先生方にお礼の気持ちとして」や、「お世話になっている方々に少しでも協力できたら」ということから、これまでお世話になった周囲への恩返しの思いがあることが伺える。伊藤は⁶⁾、「達成行動における他者志向的動機は、周りの人から応援や実際の援助を受けて、その期待に応えようとして努力する側面を含んでいる。『恩返し』という表現に現れるように、一種の互惠性に基づいた動機づけである。」と、述べている。すなわち、他者志向的動機は単に人のためだけでなく、自分が援助を受けた経験からの思

いを返していく互惠性に基づいた動機であると考ええる。先行研究において、先輩看護学生から指導を受けた後輩看護学生の意見として「先輩の話聞いて励まされた」⁷⁾や、「先輩からポジティブフィードバックの指導を受けることで、自信を持ち取り組むことができた」⁸⁾と、報告されている。本研究においては、2年次に先輩に励まされ助けてもらったことで自信となる学びを得る経験ができ、次は自分が後輩のために役に立ちたいという思いや恩返しの気持ち、他者志向的動機の中に、互惠的な理由として存在することが明らかであるといえる。これは、自分が先輩看護学生から援助を受けた経験があってこそその動機である。

学生が卒業後に就労する多くの臨床の場では、プリセプター制度を取り入れており、先輩看護師による新人教育が行われている。新人教育の多くは職場内教育（OJT）に委ねられており、先輩看護師と後輩看護師の関係性が重要となる。互惠性をもつことにより、先輩看護師から教えてもらったことへの恩返しとして、その期待に応えようと自ら努力する姿勢に繋がると考える。それは、先輩看護師との関係性にも影響し、看護師として成長していく上で重要な姿勢であると考ええる。また、多職種チームの一員として協働関係を築きながら患者へ関わっていくうえでも、互惠性は必要と推察する。超高齢社会の中、様々な職種のスタッフと互恵的に学び合える関係を築いていくことができる人材の育成が求められている。

本研究において、先輩、後輩間で学び合う経験が互惠性に基づいた動機に関連していることが明らかになった。よって、学年を超え、互恵的に学び合う機会となる本演習の意義は大きいと考える。

2. 自己志向的動機について

次に、明らかになった自己志向的動機の「自分がどれだけ成長したかを知りたいと思った」は、後輩への指導を通して自己の成長を確認したいためであり、この演習が3年間の学びの総まとめとして、自己評価の機会になっていることが明らかになった。また、「後輩を指導することで自分も学ぶことができると思ったから」は、後輩への指導経験が自己の学習となることを期待しているからと思われる。さらに、「いつか後輩をみる立場となるので教える難しさを知りたい」は、就職後に自分が先輩看護師と

して後輩の指導にあたる時のことを見据えた動機である。これらの動機は、自ら主体的に学ぼうとする動機である。この主体的に学ぶとは、自分の意志で学習への目的意識と方向性をもって主体的に取り組む姿勢である。今の自分の実力を自己評価しようと試みたり、他者への指導を通して更なる学びを得ようとする姿勢は、看護専門職として生涯学び続けていく上で重要となる。本研究の結果から、このような姿勢が学生時代に身に付いており、参加の動機に繋がったことが示唆された。

3. 個人的興味の動機について

今回、後輩の演習指導にあたっては、強制的に参加を促すのではなく、ボランティアという表現で参加を募った。したがって、参加者は自発性を持って演習指導をしていた。その参加動機の中に、「教えるのが楽しそう」「2年生との交流がもちたい」といった内容があった。これは、2年次に先輩から指導を受けて自分たちで演習をやり遂げた経験が、楽しいものであったからと推測される。そのことが演習に対する興味・関心を高め、学習意欲に影響を与える一因となったと思われる。それが、先輩となり教える立場となった時に、興味・関心のある演習に自分も参加をし、指導したいという動機に繋がったと思われる。

VI 研究の限界と今後の課題

本研究の参加者は12名と少人数の限られた調査である。また、調査時期が12月の看護師国家試験の学習時期であり、対象者への負担を考慮した調査内容であったため、協力者の思いや考えが十分に引き出せているとは言いがたい。

今後は、2年次に先輩看護学生から指導を受けた経験が3年次の実習など個人の経験の中で、どのように意義づけられ、ボランティア参加への動機に至りその後へ発展していくのかを明らかにしたい。

VII 結論

本研究の結果、先輩看護学生が演習指導ボランティアに参加する動機について以下のことが明らかになった。

1. 先輩看護学生が演習指導ボランティアに参加する動機は、他者志向的動機、自己志向的動機、個人的興味、報酬、友人同調の5つであった。

2. 他者志向的動機は人のためだけでなく2年次に指導を受けた経験や周囲への「恩返し」であり、互惠性に基づいた動機と考えられた。
3. 自己志向的動機には、後輩への指導の経験による自己の学習効果への期待と、自己の成長を確認したい思いがあった。また、自己志向的動機は、自ら主体的に学ぼうとする動機であった。
4. 個人的興味の動機には、以前先輩から演習で指導を受けた経験が興味・関心へとなり、参加動機となっていた。
5. 他者志向的動機、個人的興味の動機には、2年次に演習指導を受けた経験が動機に影響している。

VIII おわりに

学年を超えた関わりの中で教え学び合う経験は、将来的に臨床場においてチームの一員として教え学び合いながら協働関係を築いていく力に繋がると考える。よって、今後も先輩看護学生が後輩看護学生への演習指導ボランティアとして参加し、教えたり、教わったりすることができる環境をつくり続けたい。また、看護基礎教育において、個々の学生が自らの責任を果たし、他の学生に配慮しつつ協調性を発揮するための倫理的、社会的能力を身に付けられるような教育方法を開発し授業の工夫をしたい。

引用文献

- 1) 高野真由美他. 先輩が後輩を導く老年看護方法演習の相互学習効果. 川崎市立看護短期大学紀要. 第 16 巻, (1), 2011, p 65-72.
- 2) 上田伊佐子. 屋根瓦式教育でレクチャーを行う看護学生の学びの構成要素. 日本看護研究学会雑誌. Vol.32, No.3, 2009, p261.
- 3) 川村ひとみ. 縦割りグループ活動を通じた学生の体験と看護教育のあり方に関する研究. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研集録. NO.37, (3), 2012, p55-62.
- 4) 米田照美他. 先輩看護学生参加型の看護技術演習における協同学習への取り組み. 人間看護学研究. 第 10, 2012, p43-49.
- 5) 前掲 1) p68-70.
- 6) 伊藤忠弘. ボランティア活動の動機の検討. 学習院大学文学部研究 Vol.58, 2011, p35-55.
- 7) 前掲 4) p46
- 8) 前掲 1) p70